

プナンの沈香採集と NTFP 金沢謙太郎（神戸女学院大）

課題

一般に木材はメジャーな林産物、それ以外はマイナーな林産物と区分される。しかし、100-50年前の交易財としては非木材林産物（Non-Timber Forest Products; NTFP）のほうが木材よりもはるかに重要であった。当時のサラワクの輸出総額において、木材の占める割合が3%未満であったのに対し、NTFPは20%前後であった。森林の消失・劣化が農業プランテーション開発と相まって加速している現在、ここで改めて森林を伐り出さない NTFP という森林利用オプションの生産性や持続性に注目したい。今年度はまずその中から東南アジア特有の林産物で長年交易の対象となってきた沈香をとり上げ、その採集の方法や管理について参与観察を行なった。また、補足的に沈香の流通や消費の過程を探った。

調査経過

〈消費〉「香港（ヒョンゴン）」という名は香木の港に由来するといわれている。香港の上環地区や上海街では香木や線香の店が軒を連ねている。沈香片の小売価格は店によりあるいは等級により異なるが、概ね1g 2～12円である。原産地はヴェトナムあるいはボルネオと表示されているものがあつた。中東にも香木を扱う店が多い。ドバイのある香木・香水屋では沈香片は1g 1～3円程度で販売され、原産地表示はなかった。仏教圏やイスラム教圏では、香を焚いて清めるといふ宗教儀礼の小道具として沈香が長年利用されてきたが、生産地の情報についてはほとんど伝わっていない。

〈流通〉サラワク産沈香の輸出先については、森林局の年次報告書では、かつてはシンガポール、現在ではインドネシアとなっている。ただし、すべてが正規の手続きを経て輸出されているかどうかは不明である。バラム河（Baram）流域において、沈香の仲買人とおぼしき人物は上流域のロング・サン村（Long San）や中流域のロング・ブディアン村（Long Bedian）をベースに動いている。彼らと接触することで、沈香取引の特殊なルートが明らかになるかもしれない。

〈生産〉今夏、沈香採集に同行させていただいたのはバ・ライ村（Ba Lai）のプナン人（Penan）である。同村は、商業伐採の入っていないバラム上流域に位置する。同村周辺には徒歩片道3～5時間圏内に数ヶ所の沈香木群が点在する。群といっても立木密度は低く、1本ずつかなり離れている場合が多い。ちなみに、商業伐採後の森林では沈香採集に数週間を要するという。いずれにしろ沈香採るためには森の中を長時間歩かねばならない。この村で採れるのはジンチョウゲ科ジンコウ属（*Aquilaria*）の *microcarp* と *beccariana van Tiegh* の2種である。プナンは落葉や樹皮で沈香木を識別する。沈香は樹木が何らかの損傷を受け樹脂が集積した部分だけに香りを含む。プナンはその集積部だけを斧やナイフで削り取る。まれに樹木上部に樹脂がついている場合に切り倒すこともある。樹脂が再び沈着するまでには数ヶ月～数年かかる。

次年度は、同村住民の協力のもと、沈香木の生産性にかんする定量的データを収集予定。